

福井京子著

『いま求められる図書館員 京都大学教育学部図書室の 35 年』

西山 伸†

1 本書の概要

本書は、表題のように京都大学教育学部図書室に 35 年間勤務し、2009 年に退職した著者が、自らの勤務の経験を振り返り、あるべき図書館員の姿を考察したものである。本書の構成は以下のとおりである。

I コンシェルジュとしての図書館員

- 1 資料収集
- 2 調べ方
- 3 借りる
- 4 教育
- 5 カウンセリング
- 6 メンター
- 7 サプリメント
- 8 私の原点

II 私の利用教育

- 1 図書館利用教育とは
- 2 利用教育の実際

III 蔵書構築

- 1 一般書編
- 2 文庫編

この他、著者が勤務しているときに交流のあった 6 名から、著者の勤務ぶりを紹介したり本書を推薦したりする文章が寄稿されている。

「I コンシェルジュとしての図書館員」では、著者が閲覧業務を行っていたときに教員、学部生、

大学院生などによる様々な依頼や問い合わせにどのように答えていったかが「Q アンド A」の形式で記されている。その依頼や問い合わせは実に様々である。図書や雑誌が書庫内のどこに排架されているか、コンピュータによる目録検索システムをどのように使うか、他機関が所蔵している大量の資料の複写を依頼する、など図書館員の業務としてベーシックな問い合わせについては読む側も想像がつく。また、「図書館員になるには、どうしたらいいのでしょうか」という学部生の質問なども、著者と利用者との間に厚い信頼関係があることを思わせるが質問そのものは決して意外なものではない。しかし、

「アジアのどこかの国の識字率を調べたいのです」（学部学生）

「小学校に英語教育を導入すると文科省が決めた。そのようなことをテーマにして修士論文を書こうと思うが、何から始めたらいいか教えて欲しい」（専修コース所属の高校教員）
「「大正 8 年、文部大臣中橋徳五郎が毛筆廃止論、毛筆全廃論を展開した」とある、この元になる記事を見つけないのですが？」（大学院生）

「今週末に学会がある。その研究班の班長で、発表およびコメンテーターをしなければならぬ。公務が忙しくてなんにもできていない。

† 京都大学大学文書館教授

どうしようかと知人に相談したら京大の福井さんに相談しなさいと言われたから来た。福井さん助けてくれへん？」(卒業生の他大学教授)

といった研究のための手がかりや材料収集、さらに研究の内容にまで踏み込んだ問い合わせにも適確に対応している。また、卒業論文提出期限ぎりぎりになっても必要部数や製本などの準備ができていない学生の手助け、論文執筆や日々の講義での学生の悩み相談など、図書館員としての業務をはるかに超えた(と思われる)事柄についても、心のこもった対応をしている様子が描かれている。

「Ⅱ 私の利用教育」では、著者が教育学部・教育学研究科の学部生・大学院生を対象に行ってきた教育学部図書室の利用教育について記されている。図書館利用教育ガイドラインに基づく「印象づけ」「サービス案内」「情報探索法指導」「情報整理法指導」「情報表現法指導」の5領域について、新入生用、2回生用、3・4回生用、大学院生用と、対象者の段階に合わせて行っている4種の利用教育の内容と意図について紹介している。

「Ⅲ 蔵書構築」では、一般書と文庫(特殊コレクション)に分けて、著者がどのように教育学部図書室の蔵書構築に取り組んだかが述べられている。一般書については、教員個々人の研究テーマを調べ、それにあった書籍を出版目録からリストアップして教員に購入を勧めたという。その際、同じシリーズでの欠本が出ないように気を配り、また講座費の残額の確認まで行っていた。文庫については、場所がないと一旦受入を断った上司を説得して貴重な元教授のコレクションを受け入れるなど、蔵書の充実に努力した様子が描かれている。

2 若干のコメント

一読して、著者の手厚いサービスに驚きの連続

であった。これだけのことをしてくれる図書館員が在籍していたとは、教育学部の教員、学生、卒業生はなんて恵まれた境遇にあったのだろうか。教育学部関係者の手になる著書のあとがきに、著者宛の謝辞が多く見られるのも宜なるかなである。

著者の目指した図書館員像が本書の中で以下のように述べられている。

「学生にとって「学習」、「研究」のための施設に限定せず、「保健室」の役割を果たしてもいいのではないか。図書室に来てくれるだけでも、ラッキー。「図書館員兼保健室のおばさん」であるのは、むしろ望むところである」(3頁)

「利用者が要求するものを提供するのが図書館員の仕事である」(12頁)

「利用者は、図書館員と話し合い、質問される中で、調べ方、資料の存在、そして一番大切な、自分の頭の中にある漠然としたテーマや、求めている資料がはっきりとしてくる。自分が抱えている未分化の問題が何だったのかが分かり、自分でもどう表現したらいいか葛藤していることを、図書館員がうまく表現してくれる場合もある」(36頁)

「私のライフワークは2つある。みんなが図書館を好きになってくれること(本だけではなくて図書館を居場所として、また、文化的空間として)。そして、図書館が大好きな図書館員をたくさん世に送り出すことである」(40頁)

こうした著者の目標を一言で表現したのが「コンシェルジュとしての図書館員」という言葉なのである。

著者の姿勢には共感するところが少なくない。図書館と文書館という違いはあるが、筆者の勤務する大学文書館においても、職員の重要な役割は、単に利用者から請求のあった資料を提供すること

だけではなく、利用者が知りたい情報にいかにかどり着けるかアドバイスすることであると日頃から考えているからである（どれだけ実現できているかどうかはとりあえず別にして）。利用者は、常に見たい資料を特定して来館するとは限らず、「〇〇について知りたいが何を見たらいいかわからない」という状態で文書館を訪れることが決して珍しくない。そうした利用者にとって、著者のような職員の存在ほどありがたいものはないであろう。

昨今の図書資料の急速なデジタル化の状況を見ると、自宅のパソコンで図書館所蔵の資料の多くを閲覧できるようになる日もそう遠いことではないように思われる。そうになると、図書館員は自らが何のために必要なのかという問いかけにさらされる可能性が高い。著者の姿勢は、そうした問いかけへの一つの答えになり得るのではあるまいか。すなわち、図書館（特に教育機関の図書館）で重要なのは職員と利用者との間に成り立つ人と人との関係性であり、それがあってこそ図書館で所蔵されている多様な資料が生きてくるということである。大学では、教員や先輩の大学院生が学生に対して資料の探し方などをアドバイスするべきという考え方もあろうが「大学全体が忙しくなってきた中で」（2頁）図書館員の役割はむしろ重要性を増してきたとも言えるのである。

ただ、そうであればなおさら、著者がどういう経緯で「コンシェルジュとしての図書館員」を理想像とするようになったのかについて語ってもらいたかった。想像するに、就職して業務を一から修得していくなかで、学部図書室の職員として求められる役割についての認識を少しずつ深めていったと思われるが、そこでの試行錯誤（もしあれば）に触れてもらえると、これから図書館員になろうとする人たちに一層役に立ったであろう。

著者は35年の長きに亘って同じ職場で勤務し

てきた。周知のように、現在の国立大学では職員の異動や組織の改編が頻繁に行われていて、著者のような例は珍しくなっているのではないかと思われる。一方で、著者が果たしてきたような役割を全うすることは、数年での異動が繰り返される現在の人事システムのもとでは極めて困難であるのは自明であろう。専門性と流動性という相反することもある二つの要素をどのように考えるのか、著者個人の体験を踏まえて論じてもらえたならば、図書館員のあるべき姿についてもっと議論が広がるように思われる。

また少々意地悪な見方をすれば、著者のような仕事ぶりは京大教育学部という比較的小規模な学部（学部学生約300名、大学院生約200名、教職員約40名）だから可能だったのではないかと、いう気もする。特に、教員の研究動向を把握したり、大学院生の論文草稿に目を通したりといったことは、ある程度お互いの顔も見え、専攻分野にも近似性がないと難しいのではなかろうか。

言うまでもなく、公共機関のサービスには継続性が求められる。つまり、どの職員が担当しようと、あるレベルまでのサービスは間違いなく提供されなくてはならない。そうでなければ公平性が担保できないからである。「Aさんがいなくなってから、あそこの機関のサービスは格段に悪くなった」というのは、本来あってはならない。その意味では、ノウハウの確立と継承が、公共機関の職員にとって大変重要である。他方、実に多様な利用者の要求に応え、彼らに満足感を与えられるようになるには、「あるレベルプラスアルファ」のサービスが不可欠であり、そこが熟練職員の腕の見せ所でもある。そうした普遍性と特殊性の兼ね合いは、多くの職場で良心的な職員が頭を悩ませているのではなかろうか。著者の体験からこうしたことに何が言えるか、ぜひ展開してもらいたかったと感じる。

失礼なことを書き連ねてしまったかもしれない。それも、他学部の出身のため著者のサービスを若いころに十分受けられなかった筆者の「ひがみ」から来るものであろう。筆者も含め、サービスを提供する側にある職員がそれぞれの「プラスアルファ」を磨いて利用者と接する、そのための

またとない見本が本書に活写されていることはいくらか強調してもしすぎることはない。そのような仕事に就きたいと考えている人たちに一読を強く勧めたい。

(岩田書院刊、A5判、120頁、2012年4月発行、1600円)